

—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

リビア：ザイダーン首相の一時誘拐事件

2013年10月10日、リビアのザイダーン暫定首相がトリポリ市内の宿舎から誘拐され、数時間後に解放されるという事件が発生した。この事件については、首相を誘拐した主体とその意図、リビアの治安情勢やイスラーム過激派の動向などとの関連で様々な憶測が取りざたされている。報道などを通じて現時点で判明している事件の概要と今後の展望は以下の通り。

1. 犯行の主体、目的

ザイダーン首相は、解放後テレビ局の取材に応じ、「政府放逐だけに関心がある政治団体」が背後にいると述べた[2013年10月11日付 ハヤート]。同首相は、この団体の名称は議会の本会議で発表すると述べ、取材では明らかにしなかった。また、「革命戦士作戦室」なるカッツァーフィー政権放逐の際に活動した武装集団が犯行声明を発表したとの報道もあったが、同団体は報道内容を否定、事件と無関係であると表明している。

2. アブー・アナス・リービー拉致との関連

今般の事件は、7日にアメリカの特殊部隊がトリポリに在住していたアル＝カーイダ容疑者のアブー・アナス・リービーを拉致、リビア国外に連れ去った事件との関連が疑われた。リービーの拉致については、リビアの議会が主権に対する明らかな侵害だと主張し、アメリカに対しリービーの引渡しを要求したり、リビア国内に跋扈する武装勢力の中のイスラーム主義者による反撃が警戒されたりしていた。リービーは、2010年にイランからリビアに帰国し、2011年のカッツァーフィー政権放逐の祝典に公然と姿を現すなどしていたが、これまでイスラーム過激派が行っている広報活動の場では目立った活動がなく、特段注目されてもいなかった。また、同人は1998年のケニア・タンザニアのアメリカ大使館爆破事件の容疑者として追跡されていたが、現在もアル＝カーイダの活動家として重要な活動をしていたり、リビアでイスラーム過激派を指導するような立場にいたりしたかについては不明である。

イスラーム主義者による犯行説については、「アンサール・シャリーア団」の関与を疑う説があったが、ザイダーン首相は上記の取材で、「アンサール・シャリーア団」の関与を全面的に否定、議会に参加している会派・政治勢力が事件の背後にいることを示唆した。

3. 展望

2011年のカッツァーフィー政権放逐以来、リビアは憲法制定や新憲法に基づく議会選挙の実施などの政治過程を日程どおり進めることができていない。また、カッツァーフィー政権放逐のための戦闘の際に各地で乱立した様々な武装集団が、解体されないまま跋扈し、自らの要求事項の実現のために省庁・議会の庁舎の包囲・占拠事件を頻発させている。これらの集団は、当初は解体・武装解除した上でリビア軍や警察に編入される計画

であったが、武装集団に対するリビア政府の統制は名目的なものにとどまっている。これを受け、最近では石油などの天然資源の生産・輸出も度々滞っている。

一方、リビアで活動するイスラーム主義者は、2012年9月にベンガジのアメリカ領事館を襲撃するなどの事件を起こしたとされ、脅威が懸念されている。しかし、2013年4月に、イスラーム的マグリブのアル=カーイダ幹部のアブドゥルイルフがインターネット上で募った質問への回答で、リビアやチュニジアのイスラーム主義者に好意的な発言をしたものの、組織的な連携はないと回答している。また、リビアのイスラーム主義者の武装勢力の中で、アル=カーイダに明示的に忠誠表明を行った団体も、アル=カーイダ側から名指しされて賞賛を受けるような団体も現時点では存在しない。

以上から、現時点ではザイダーン首相の誘拐事件はイスラーム過激派の犯行よりも、リビアの政治過程の中での勢力・権益争いである可能性のほうが高いと思われる。今後のリビアの政治・社会情勢を観察する上では、リビアの政治過程や行政・立法機関が正常に機能していないことを前提にすることが必須である。また、リビアで活動するイスラーム主義者の武装勢力も、アル=カーイダのような、既存の国境を越えて活動し、現在の国家や国際関係を究極的には破壊しようとする意志が乏しい。リビアの武装勢力は、イスラーム主義者とはいえ、現在の国家や体制が存続することを所与のものとして、その中での勢力・利権争いに参加している場合が多く、彼らの活動は、国際的なイスラーム過激派の広報活動の主流に乗っていない。また、イスラーム過激派の広報活動を受容する人々から強い関心を持たれているわけではない。重要なことは、リビアの治安情勢や武装勢力の活動が、リビアという枠内での争いなのか、イスラーム過激派のような国家を超越・破壊しようとする兆候を帯びる活動なのかを見極めることであろう。

(イスラーム過激派モニター班)